「聞く力」をつけるために

東京都台東区立御徒町台東中学校教諭　甲斐（かい） 利恵子（りえこ）



4月の初めのころは集中していた生徒も最近では緊張感がなくなり、おしゃべりが多くなってきました。

まずは注意してから授業を始めることも多く、先日は授業中に私語をしていたので注意したところ、「なんで、わたしばっかり注意するんですか。」と反抗的な態度でした。

生徒の聞く力をつけるにはどうしたらいいのでしょうか。



言葉を学ぶ教室には、明るい雰囲気と適度な緊張感が必要だと感じています。気持ちが開かれていないと、子どもたちの中に本当の言葉が生まれてこないと思うからです。

もちろん、それはわたしたち教師にも言えることです。きちんとさせよう、静かにさせようということに気持ちがいってしまうと、どうしても注意が多くなります。本当に子どもたちに伝えたい言葉、語りたい言葉が出にくい雰囲気になってしまいます。

「静かにしなさい。」「集中しなさい。」と言わなくても、静かになる教室、集中する教室になるといいですね。そのためには、思わず「静かになってしまう学習」の用意をすることが必要になります。

「聞く力」は、すべての学習の基本となるものです。そのために、どんなことを心がけているか、実際にはどんな工夫をしているかをご紹介したいと思います。

■聞きたくなる話を

「静かにしなさい。」と言わないで静かになるのは、「聞きたい」と思うとき。先生の話も子どもの話も「聞きたい」雰囲気を創り出すことがわたしたちの仕事です。

中学一年生を担任したときがいちばんのチャンス。「伸びたい。」「がんばりたい。」と思っているときに、その気持ちに沿うお話をすると、子どもたちは聞くことが好きになってきます。もちろん、一年以外を担任していても大丈夫。子どもたちはおもしろいことにはめっぽう敏感で、なんだ、なんだのノリで学習に向かうものです。

四月に出会った子どもたちに、わたしは「からのコップ」というお話をします。これからの学習を進めていくにあたっての心構えのような内容ですが、聞き取りメモの取り方を教えたり、話を聞いて「要約する」という学習を教えたり、さっと感想を書くことの練習に使ったりできる便利なお話なので紹介したいと思います。

【からのコップ】

みなさん、頭の中にコップをイメージしてください。そこへ、お母さんが牛乳を持ってきました。とくとくとくとく……。牛乳で満タンになりました。さあ、飲もうと思ったときに今度はオレンジジュースを持ってきました。オレンジジュースが大好物です。どうします?

ある人は牛乳をごくごくと飲んで、コップを洗い、オレンジジュースを飲むかもしれませんね。またある人は、牛乳よりオレンジジュースが飲みたいと思って、牛乳を誰かに飲んでもらったりするかもしれませんね。いずれにせよ、新しく持ってきたオレンジジュースを飲むために、コップをからにすると思います。

このことはわたしたちの生活にもあてはまるように思います。心の中にもコップがあるのではないでしょうか。心のコップが満タンだと何も入りません。

国語はきらいなんだよなあ、あの人のいうことはつまんない、あいつの言うことは聞きたくない。算数は苦手だ。そんなふうに思ってしまうときは心のコップが一杯になっています。

これからみなさんは中学という場で、さまざまなことを学びます。心のコップをいつでもからにして、たくさんの新しいことをいっぱい学んでほしいと思っています。

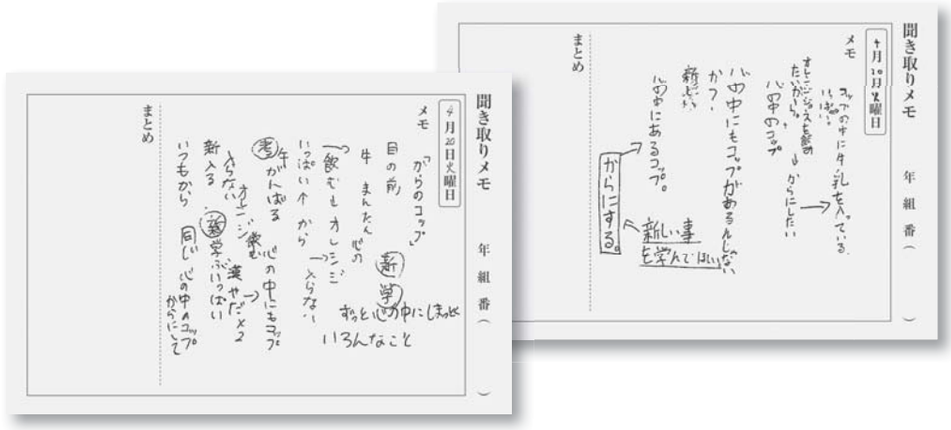
このように、小さなお話をするときに活用しているのが「聞き取りメモシート」です。（資料1）いろいろなものに使えてとても便利です。



◀資料1　聞き取りメモシート

聞き取りメモは、縦書き横書き斜め書き、自由自在。イラストを入れようと何をしようと自由。「工夫してやってみましょう。」と、指示します。また、お話を聞いたあとには、「『まとめ』の欄に、先生の伝えたかったことを一文でまとめなさい。」という学習をしました。十分もあればできることです。子どもたちはとても集中して聞いていました。

◀資料2　生徒たちの聞き取りメモ例



さらに、生徒たちの取ったメモ（資料2）を印刷して配り、教えたいことに焦点を絞って講評すると効果的です。子どもたちの書いたものの中には、必ず学習材になるものがあります。

例えばメモの取り方ですが、字の乱暴さなどは今は問わないと教えます。いつでもどこでもていねいに書けたらいいのですが、ここでは速さと正確さが大事です。子どもたちの資料を見ながら、「ほら見て、これもたちの字あまりきれいとは言えませんね。でも、いいんですよ。大事な中身がきちんと書かれていますからね。」と言ったりします。そのことを伝えるには、「メモ」の字と「まとめ」の字の違いが際立つ資料を使うといいのです。

また、メモを取るときには聞いたそのままをだらだらと文で書いていくのではないということを教えます。記号を使ったり、単語だけで書いたり、人によってはイラストを描いたりもします。課題を意識しつつ（今回は先生の言いたかったことを一文でまとめなさいというものでした）、大事なところは線で囲んだり、傍線を引いたり、★印をつけたりしてメモをするのだと伝えます。

こういう子どもたちの書いた作品をもとに講評する「まとめ」の授業をすることによって、聞かせっぱなしを防ぎ、何を教えたいのかという自分への自問もできるようになります。

■お話をいっぱい貯金する

「よく聞ける子にしたい。それなら面白い話をたくさん用意していることです。」

これは大村はまさんの言葉（※1参照）です。この言葉を実践するために、わたしはお話を原稿用紙に書いています。

何か心に留まった出来事や言葉、文章の一節をメモしておきます。それをときどき読み返しながらひとつのお話にしていきます。何を伝えたいのか、何という言葉を子どもの耳に届けたいのか、この話を聞いてどういう学習をさせたいのかなど、いろいろな目的を加味し、内容を吟味して約三分ほどの話に仕上げていきます。

お話のタネがあるといいなと、常に心のどこかで思っていると、なにかがそのアンテナにひっかかってくるものです。そのためにもさっとメモを取ったりすることは大事ですね。ときどき、そのメモをもとに、お話を組み立ててみるといいと思います。貯金はいっぱいある方が嬉しいものです。

■意識して授業に「お話」を取り入れる

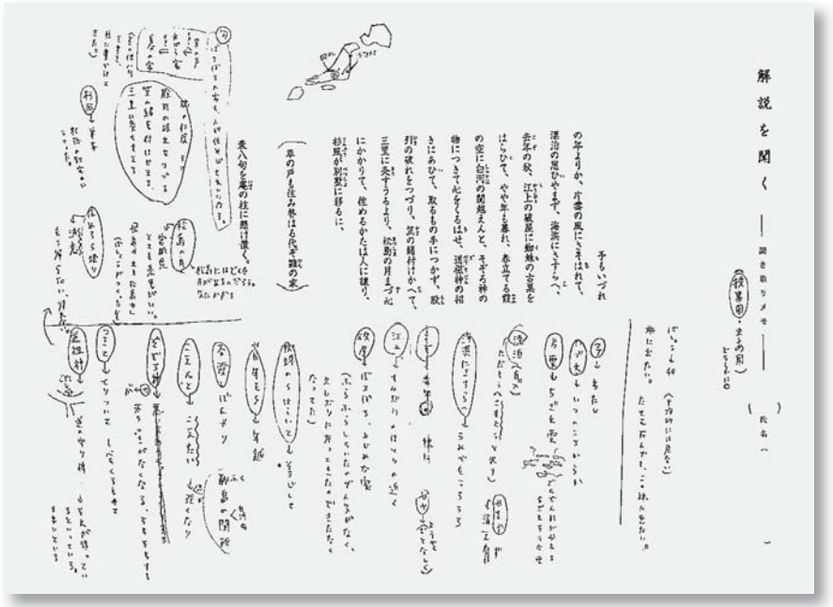
授業で子どもたちに説明する場面は多くあります。知識的なこともあれば、解説のようなものもあります。そのような説明のときに、ただなんとなく流れに沿って話し出さず、区切りをつけて、メリハリをつけるといいように思います。題をつけると効果的です。

例えば、「走れメロス」の学習の前や後に「太宰治の人と作品」というタイトルで話します。また、「近代短歌の基礎知識」というタイトルで表現技法について説明したり、「『ますらをぶり』と『たをやめぶり』」で万葉・古今について説明したり、「解説を聞く―おくのほそ道」などもお話の題材になります。（資料3）

なんとなく説明しないで、一回の話で理解させようという迫力で話してほしいと思います。「お話」の材料は身近なところにいっぱいあると思います。

※1…ビデオ「大村はま創造の世界」特別付録『大村はまアルバム』（大空社）より引用。

◀資料3「解説を聞く―おくのほそ道」





おもしろい話をいっぱい聞いていると、そこには静かで活気のある空気が流れます。そういう雰囲気は自分たちが集中して学習できているという実感を持たせ、いろいろなことに心が開いていきます。

本の紹介でも、自分が体験したことでも、まずはやってみることです。子どもたちはそういう先生の姿が大好きだと思います。